

ごあいさつ

本日は鶴見大学図書館第137回貴重書展「ロビンソン・クルーソーの世界」にお運びくださいまして、ありがとうございます。

今回の貴重書展では、イギリスの文人で17世紀後半から18世紀前半に活躍したダニエル・デフォー (Daniel Defoe, 1661-1731)の代表作『ロビンソン・クルーソー』(*The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe*)を展示いたします。この作品はしばしば、イギリスで出版された最初の小説とみなされ、そうした文脈で議論されることが多い作品です。しかし出版当初、この作品は架空の物語であることを示す記号をことごとく差し控えて出版されました。もともとジャーナリストとして活躍していたデフォーがおそらくは経済的な理由のために60歳のときに書いたこの作品は、作家が出版した初めてのフィクションです。しかしデフォーは、はじめてのフィクションに作者として自分の名前を記さず、嘘偽りのない実話であることを明記して出版したのです。

『ロビンソン・クルーソー』の人気については、ここで改めて言葉を費やす必要はないでしょう。この作品はイギリスだけではなく世界中で、そして日本でもよく読まれています。子どもの頃に絵本や児童書として親しみ、文庫本で日本語翻訳を読んだという方も多いのではないのでしょうか。日本に『ロビンソン・クルーソー』が翻訳紹介された、つまりクルーソーの世界と日本が結びつけられたのは江戸時代末期のことでした。それ以来150年あまり、数々の日本語翻訳が出版されてきました。明治維新以降、日本の近代化の過程と同じ時間を刻んできたのが『ロビンソン・クルーソー』という書物です。

日本語に翻訳される約150年前の1719年に『ロビンソン・クルーソー』は出版されました。出版されると大変な人気となり、たちまち6版を重ねました。海賊版の出版も横行したといいます。そして、現在でもその人気は衰えることはありません。最近では、英国による植民地主義の影響を再検討するポストコロニアル批評による読み直しの動きなどもあって、物語の語り手かつ登場人物であるクルーソーという人物を理想化する従来の読み方には疑問が提示されてきました。しかしながら、こうした再読の試みは『ロビンソン・クルーソー』という文化的生産物の意義や価値を必ずしも否定するものではありません。それどころかむしろ、本書がイギリスの歴史や文化を考える上で不可欠な書物であることを裏付けることとなりました。特に、フライデイという登場人物について、あるいはフライデイを構築する支配的な言葉の功罪について考察を促すきっかけとなりました。

こうした最近の読み直しの経緯をふまえ、『ロビンソン・クルーソー』が現代のわたしたちに問いかける意義を、出版当時の書物に遡り、さらにはその姿がどのように引き継がれ、あるいは変化したのかのなかを探ろうと、今回の展示を企画いたしました。この作品の書物としての歴史は、小説の歴史、そしてイギリス海外進出の歴史を背景としています。そうした歴史の流れを、書物の中に確認していただければ幸いです。また、今回は特に、日本で翻訳出版される19世紀中頃までの版を中心に展示いたしました。日本に上陸する前にどのような姿をしていたのかご覧いただくとともに、両者の歴史を書物の流れとして接ぎ木することが、今回の展示のねらいです。

鶴見大学の図書館には、日本ではおそらくこれ一冊しかないという極めて貴重な初期の『ロビンソン・クルーソー』本のコレクションがあります。普段は貴重書庫で静かに息をしている本たちを、クルーソーが海賊によって28年間の無人島生活に終止符を打ったように、書庫の外へ運び出します。読書には不向きな古い本たちではありますが、ご来場の皆さまのまなざしに触れて、ふたたび「読まれる」経験をいたしますれば、新たな息吹を獲得してゆくことでしょう。

I.ダニエル・デフォー：肖像画、伝記、アイデンティティ

1.『生粋のイングランド人の著者の真正の全集』（1703-05年）

Defoe, Daniel. *A True Collection of the Writing of the Author of the True Born English-man*. Corrected by himself. London: Printed, and sold by most booksellers in London and Westminster, 1703-05.

巻頭にあるデフォーの肖像がまず、目を引く。これはジェレミア・タヴァナーによるもので、M・ヴァン・デア・グヒトが版画にしたものである。豊かな巻き毛のウィッグをつけたデフォーのイメージは、その後何年にもわたって引き継がれていくことになった。

本書はデフォー本人が監修した全集としては、最初のものである。第1巻は1703年7月22日に、デフォー自選の22作品を収めて出版された。第2巻は1705年はじめに出版された。

全集のタイトルでは、特に2点が注目される。誰の全集なのか作家名が明記されていないかわりに著者の代表作が記載されていること、そして「真正の」(‘True’)という言葉が添えられていることである。

当時、タイトルページに著者の名前を記さないことはそれほど珍しいことではなかった。本書の場合、誰の全集であるかは、口絵の肖像画で推測がつく。とはいえ、著者名ではなく著作名を記しているのは、デフォーが1700年初頭に発表した「生粋のイングランド人：ひとつの風刺」(The True-born English-man: A Satyr)が大変な評判となり、時の国王ウィリアム三世にも拝謁し、さらには謝礼を賜わるなど、大変に気をよくしたためであるといわれる。以降デフォーは自分の書くものに、「生粋のイングランド人」の作者と記すようになった。

「真正の」と添えられているのは、デフォーの著作でないものは含まれていないとの意味が込められている。タイトルページの次のページで、デフォー自身がその理由を説明している。著者名を明記しない出版慣行も手伝って、当時のデフォーは自分が書いていないものをデフォー作として押し付けられることがあった。そこで著者の自選であることを強調したのである。これはまた、海賊版対策でもあった。同じページにおいて、デフォー自身が海賊版を購入しないよう注意を呼び掛けている。海賊版の出版者が不当な利益をあげるのを阻止したかったためである。

2.『ロビンソン・クルーソーの冒険』下巻、トマス・ストッダード画（ロンドン：ジョン・ストックデール、1790年）

Defoe, Daniel. *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner, and The Farther Adventures of Robinson Crusoe; being the second and last part of his life, and the Strange Surprising Accounts of his Travels around Three Parts of the Globe*. London: John Stockdale, 1790. In two volumes.

1790年ジョン・ストックデールが刊行した『ロビンソン・クルーソー』は、巻末にジョージ・チェンバース(George Chambers)による「ダニエル・デ・フォーの生涯」(‘The Life of Daniel De Foe’)を収める。これはデフォーの伝記としては最初のもと言われている。この伝記はデフォーを『グレート・ブリテンの連合の歴史』(展示リスト No.3)および『ロビンソン・クルーソー』の著者であると紹介し、さらに18世紀が生んだ偉大な文人の一人と評価している。なお、著者の肖像画はトマス・ストッダードによる。

実のところ、『ロビンソン・クルーソー』の作者が誰であるのか、当時の読者には出版後比較的早い段階で分かっていたようである。初版の出版から約5ヶ月後にはチャールズ・ギルドンという人物が、『ロビンソン・クルーソーの生涯と冒険』をもじった『ロンドンのメリヤス業者ミスターD—De F—の生涯と冒険』という書物を発表しているためである。

3. 『グレート・ブリテンの連合の歴史』(エジンバラ：アンドリュー・アンダーソン、1709年)

Defoe, Daniel. *The History of the Union of Great Britain*. Edinburgh: Andrew Anderson, 1709.

イングランドとスコットランドの合併にいたる過程を追った歴史書である。『ロビンソン・クルーソー』の前にもデフォーはフィクションを書いていたが、彼の著作の多くは政治的パンフレットやジャーナリズムの文章であった。

1707年、「連合法」(the Act of Union)によりイングランドとスコットランドが統合され、すでにイングランドと合併していたウェールズ(1534-1543年連合法)を含めたグレート・ブリテンが誕生する。本書はエドワード1世(在位1274年から1307年)からチューダー朝を経てスチュアート朝のアン女王(在位1702~7年)の治世に至る、イングランドと他ネイションとの合併の歴史を追ったものである。巻頭には、アン女王への献辞が述べられており、「女王陛下のお気に召しますように。陛下の忠実かつ従順なしもべ、DANIEL DEFOE」との署名がある。

本書の執筆は「連合法」が施行される前から進んでいたようである。1706年12月と1707年1月、デフォーは自ら編集主幹をつとめる『レビュー』誌(*Review*)に、本書を執筆中であると書いている。グレート・ブリテンの誕生という国家の歴史の変わり目をリアルタイムでとらえて時宜よく出版したのである。

II. 『ロビンソン・クルーソー』の歴史

4. 『ロビンソン・クルーソーの生涯と冒険』第2版(ロンドン：ウィリアム・テイラー、1719年5月)

5. 『ロビンソン・クルーソーの生涯と冒険』第3版(ロンドン：ウィリアム・テイラー、1719年6月)

6. 『ロビンソン・クルーソーの生涯と冒険』第4版(ロンドン：ウィリアム・テイラー、1719年8月)

4. Defoe, Daniel. *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner*. 2nd ed. London: William Taylor, 1719.

5. ---. *Robinson Crusoe*. 3rd ed. London: William Taylor, 1719.

6. ---. *Robinson Crusoe*. 4th ed. London: William Taylor, 1719.

『ロビンソン・クルーソー』の第1部は1719年に出版された。出版元はロンドンの書店、ウィリアム・テイラーである。初版の出版は4月25日で、1,000部が発行された。出版されるやいなや大評判となり、同年5月12日には第2版、6月6日には第3版、8月8日には第4版が出版された。

『ロビンソン・クルーソー』の原題は非常に長い。日本語に訳すと『船乗りであるヨーク出身のロビンソン・クルーソーの生涯と不思議な驚くべき冒険。彼はオルノコ川の河口に近いアメリカ海岸の無人島にまったく一人で28年間を過ごした。船の難破によって海岸に打ち上げられたもので、乗組員のなかで彼ひとりだけが生き残った。最後にいかにして不思議にも海賊たちによって救い出されたのかの説明もつけて』となる。これはタイトルであると同時に物語の筋書きをまとめた説明であり、読者の興味を掻き立てようとするタイトルである。

何より興味深いのはフィクションであるにもかかわらず、「彼[ロビンソン・クルーソー]自身によって書かれた」(Written by Himself)と記載されていることである。この本のどこにも、作者名であるDaniel Defoeという名前は見当たらない。絶海の孤島に28年間を暮したロビンソン・クルーソー本人が自らの経験を振り返った実話の冒険譚であることが

前面に押し出されている。ちなみに、タイトルページの一番下にある帆船のマークはロビンソン・クルーソーの物語にちなんだものではなく、版元であるウィリアム・テイラーの商標である。

ロビンソン・クルーソーという人物名に具体的なイメージを与えるのが巻頭の挿絵である。ここに描かれたクルーソーは山羊皮の衣を身に着け、帽子をかぶり、履物はない。また、難破した船から運んできたライフル 2 挺の他、腰にはサーベルをぶらさげている。これ以降、このイメージをもとにしたクルーソー像が何度も印刷されて、ロビンソン・クルーソーという人物の定番イメージを作り上げていくこととなる。また、ここで強調されているのは、漂着した島で自給自足の生活を営み聖書を読むクルーソーではなく、むしろ島をそして自分の身を守ることに懸命なクルーソーである。

第 4 版には新たに、クルーソーの航路を辿った世界地図が織り込まれた。この地図は、第 2 部に挟み込まれたものと酷似している。第 4 版と第 2 部の初版は同時期の出版されたためであろう。このため、第 1 部の物語とは必ずしもそぐわないものも含まれている。

7. 『ロビンソン・クルーソーのその後の冒険』（ロンドン：ウィリアム・テイラー、1719 年）

8. 『ロビンソン・クルーソーの冒険と真剣な反省』（ロンドン：ウィリアム・テイラー、1720 年）

7. Defoe, Daniel. *The Farther Adventures of Robinson Crusoe; being the second and last part of his life, and the Strange Surprising Accounts of his Travels around Three Parts of the Globe*. London: William Taylor, 1719.

8. ---. *Serious Reflections during the Life and Surprising Adventures of Robinson Crusoe; with his Vision of the Angelick World*. London: William Taylor, 1720.

『ロビンソン・クルーソー』出版当時の人気ぶりは継続作の出版にうかがうことができる。クルーソーものの第 2 部は 1719 年 8 月に、第 3 部は 1720 年に出版された。

第 2 部には出版社であるウィリアム・テイラーが海賊版を買わないよう読者に呼びかける次のような通知が含まれている。「この本を模した簡約版が T.コックス（アムステルダム・コーヒーハウス）にて印刷されているが、それにはまともなく書き散らしたような数節が含まれているにすぎない。購入しないように」というものである。

第 3 部には、クルーソーの航海地図ではなく、漂着した島の地形図が新たに折り込まれた。ライフル 2 挺に三角帽をかぶったおなじみのクルーソーが中央下にいて、現地の人々に囲まれている。また地図の中央には住居があり、お供のオウムが「かわいそうなロビン・クルーソー」（Poor Robin Crusoe）と鳴いている。

また、「序文」（Preface）はこれまで署名がなかったが、第 3 部ではじめて「ロブ・クルーソー」（Rob. Crusoe）と署名された。これにより、一連のシリーズは架空の話ではなく、嘘のない実話であるという点が一層強調されることとなった。

9. 『ロビンソン・クルーソーの冒険』第 8 版、2 巻（ロンドン：トマス・ウッドワード、1736 年）

9. Defoe, Daniel. *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner, and The Farther Adventures of Robinson Crusoe; being the second and last part of his life, and the Strange Surprising Accounts of his Travels around Three Parts of the Globe*. 8th ed., London: T. Woodward, 1736.

第 1 部と第 2 部をまとめて出版された第 8 版には、初版を模した口絵に該当のページが明記されている。第 2 部には、初版同様クルーソーの旅程を示した世界地図が折り込まれている。また、地図の他に何枚かの挿絵が使われている。18 世紀には小説に挿絵をつける

ことはそれほど珍しいことではなかった。

『ロビンソン・クルーソー』の挿絵には、クルーソーの最初の航海の様子や、無人島に漂着して難破船から筏で荷を引き上げるため場面、オウムや動物に囲まれての生活、浜辺で見つけた足跡、フライディの救出と上下関係の確立、食人種との戦いや、イングランドへの帰還などのシーンが描き出されている。特に注目されるのが、先住民の描かれ方である。肌の黒い人々として描かれる先住民は、それ以外の特徴を持ち合わせないかのごとくに描かれている。第2版に織り込まれた孤島の地図（展示番号6および7）にも明らかだが、ジョゼフ・コンラッドが『闇の奥』（1899）でマーローに語らせるように「黒いかたち」（Black shapes）として、また個人としてではなく「集団」として描かれているものが多い。第8版におけるフライディ救出の場面でも、クルーソーにとって敵たる先住民は多数の黒い影である。

第2部でクルーソーは中国まで足をのぼす。ここでは、クルーソー一行が万里の長城を訪れた際の挿絵を展示する。壁というよりは塀に近く、背後にはイスラム経のモスクと西洋ゴシック建築の塔や仏塔とを折衷にも見える建造物が描かれている。

10. 『ロビンソン・クルーソーの冒険』新版（ロンドン：A.ミラー、1798年）

10. Defoe, Daniel. *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner, and The Farther Adventures of Robinson Crusoe; being the second and last part of his life, and the Strange Surprising Accounts of his Travels around Three Parts of the Globe*. A New Edition. London: A. Miller, 1798. two in one volumes.

新版である。第1部と第2部が1冊にまとめられている。デフォーは第3部まで書いたが、この頃までに最終部はほとんど出版されなくなり、読まれなくなっていったようである。なお、新版ではあるが、タイトルページでは、英語のSにロングSと呼ばれるタイプを使用している。古さを強調するようなタイプを選んで組んでいる。

この版のタイトルページには「彼自身によって書かれた」という文言も、作者ダニエル・デフォーの名前も見当たらない。『ロビンソン・クルーソー』の作者としてデフォーの名がタイトルページに刻まれるのは、この版が出版されてから7年後の1805年にロンドンにあるヘンリー(Henry)から出版された青少年向けの改訂版およびレーン・アンド・ニューマン(Lane and Newman)から出版された新版からのことである。

タイトルページの見開きに印刷されたクルーソーの口絵は、初版のものをほぼそのまま模しているが、明らかな違いもある。初版のクルーソーはうつむきかげんで表情も憂いに満ちていたが、この版では表情が単純化されてあいまいになっている。また背後に描かれた帆船の進路も逆になっている。

11. 『ロビンソン・クルーソーの冒険』2巻、トマス・ストッダード画（ロンドン：ジョン・ストックデール、1804年）

12. 『ロビンソン・クルーソーの冒険』下巻、トマス・ストッダード画（ロンドン：ジョン・ストックデール、1790年）

11. Defoe, Daniel. *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner, and The Farther Adventures of Robinson Crusoe; being the second and last part of his life, and the Strange Surprising Accounts of his Travels around Three Parts of the Globe*. London: John Stockdale, 1790. In two volumes. 1804

12. Defoe, Daniel. *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner, and The Farther Adventures of Robinson Crusoe; being the second and last part of his life, and the Strange Surprising Accounts of his Travels around Three Parts of the Globe*. London: John Stockdale, 1790. In two volumes.

展示番号 11 は 1790 年にジョン・ストックデールが出版した 2 巻本（上巻展示番号 12、下巻展示番号 2）の再販と推測され、巻頭の「広告」(Advertisement)が 1790 年 8 月 20 日付となっている。初版時の挿絵 16 枚に新たに 4 枚の挿絵を加えた。また、大き目の紙面にたっぷり余白をとって印刷されている。印刷に使われた紙も厚手のもので、タイプセットも整っている。

展示番号 11 の口絵からも推測されるように、トマス・ストッターの挿絵はロビンソン・クルーソーの物語にイギリス国内の、あるいは家庭の要素を持ち込み、読者がクルーソーに共感や親近感を覚えやすくしたと言われている¹。上巻の口絵は従来のクルーソー像にかわり、両親の期待に反し、海外に出て一儲けしたいと願う若いクルーソーが両親の説得を受けている場面を描いている。また下巻はクルーソーが島に戻り、スペインの船員に農耕具を渡して船長と握手している場面を伝えている。タイトルページの挿絵も、クルーソーが島で使用していた生活のための道具をエンブレムにまとめたものである。

展示番号 12、フライディ救出の場面では、両者の視線が同じ方向に向いていること、クルーソーがフライディを守るような構図になっていることから、両者の関係が敵対的なものではないことをうかがわせる。ストッターによるフライディは、「顔形のよい好男子で、手足はまっすぐに伸びて立派な体格」であり、「微笑んだときになど、ヨーロッパ人のような柔和さと愛想のよさ」をうかがわせる²。また、背後の木立は、下巻の口絵の場合と同様に、ヤシの木などの熱帯のイメージよりも、イングランドの田園の一コマを彷彿とさせる。

1. デイヴィッド・ブルーエット『ロビンソン・クルーソー』挿絵物語——近代西洋の二百年(1719-1920)』ダニエル・デフォー研究会訳（大阪：関西大学出版部、1999年）、p.97.

2. ダニエル・デフォー『完訳ロビンソン・クルーソー』増田芳郎訳（中公文庫、2010年）、p.293.

13. 『ロビンソン・クルーソーの生涯と冒険』チャールズ・アルタモント・ドイル画（エジンバラ：アダム・アンド・チャールズ・ブラック、1859年）

13. Defoe, Daniel. *The Life and Surprising Adventures of Robinson Crusoe*. Illustrated by C. A. Doyle. Edinburgh: Adam and Charles Black, 1859.

スコットランドのエジンバラで出版された版で、チャールズ・アルタモント・ドイルによる挿絵 4 枚が挿入されている。また、本の装丁の面でも意匠があり、クルーソーのエンブレムが表紙と背表紙に金押しされている。どちらも無人島での生活を端的に表現する図柄である。

クルーソーの物語を簡便に把握するという工夫は、本文の構成にも見られる。この版では全体を 18 章にわけ、各章のはじめに要約が置かれている。例えば、第 7 章(Chapter VII)の要約からは、クルーソーが島を探検し、植生や天候を発見し、島での生活に適合していくくぐりぐりが語られていることがわかる。章ごとの要約は目次として巻頭にまとめられており、物語の概要を手早く把握できるようになっている。

14. 『ロビンソン・クルーソーの冒険』第 10 版、トマス・ヘンリー・ニコルソン画（ロンドン：S. O. ビートン、1864年）

14. Defoe, Daniel. *The Adventures of Robinson Crusoe*. With memoir of the author. Illustrated by H. Anelay and R. Hutula. Separate plates on tinted paper, and numerous woodcuts inserted in the text, designed by T. H. Nicholson, and engraved by C. W. Sheeres. Tenth edition. London: S. O. Beeton, 1864.

19 世紀のヴィクトリア朝では、挿絵をふんだんに入れた『ロビンソン・クルーソー』が何冊も出版された。その傾向が顕著になるのが 1860 年代である。S.O.ビートンから出版されたこの版にも、100 枚程度の挿絵が使われている。

この挿絵は4種類に分けられる。カラー口絵、本文と同じ紙に印刷された版画（本文の中に挿入された挿絵、紙面1ページにわたる挿絵）、そしてティント紙（挿絵印刷用の薄地色の紙）に印刷された挿絵である。

挿絵が増えるにしたがって、文字テキストと画像テキストの関係が変わり始めたと、『ロビンソン・クルーソー』の挿絵を研究したデイヴィッド・ブルーエットは指摘する。すなわち、これまでは文字テキストの理解を助けるものとして挿絵が挿入されていたのだが、「今や逆に映像の説明」になった¹。1『ロビンソン・クルーソー』という小説が少なくとも二つの物語——デフォーのテキストが読者に想像させる物語と挿絵作家の描く画像（つまり解釈）——を含みこみ、さらに両者が拮抗することにもなったのである。

¹ デイヴィッド・ブルーエット『ロビンソン・クルーソー』挿絵物語——近代西洋の二百年(1719-1920)』ダニエル・デフォー研究会訳（大阪：関西大学出版部、1999年）97頁。

15. 『ロビンソン・クルーソーの冒険』ジョン・ドーソン・ワトソン画（ロンドン：ラウトレッジ、1864年）

15. Defoe, Daniel. *The Life and Adventures of Robinson Crusoe. With a portrait; and one hundred illustrations by J. D. Watson, engraved by the Brothers Dalziel.* London; Routledge, Warne, and Routledge, 1864.

19世紀のイギリスで指折りの挿絵画家であったジョン・ドーソン・ワトソンと、最高の彫版師と言われたダルジール兄弟による版画100枚あまりを付して出版された豪華版である。ワトソンはラファエル前派という当時の芸術運動に共鳴した画家で、人物の性格まで精緻に描き出すその技量は確かなものであった。ここに展示した挿絵はクルーソーが病気になる、気弱になっている場面である。クルーソーの不安がこちらにまで伝わってくるようだ。

ラウトレッジ版の序文において、デフォーは知的かつ道徳的な面でシェイクスピアやベーコン、ミルトン、バニヤン、ニュートンに匹敵する作家であり、楽しませながら真実味あふれるフィクションを提供する、すなわち楽しませつつ教化するという点ではこれまででもの最高ランクに属する作家であると称賛している。

16. 『ロビンソン・クルーソーの冒険』（ロンドン：キャッセル、1869年）

16. Defoe, Daniel. *The life and strange surprising adventures of Robinson Crusoe, of York mariner. As related by himself. With upwards of one hundred illustrations.* London: Cassell, Peter and Galpin, 1869.

19世紀のイギリスで挿絵入りの文学作品を数多く世に出したキャッセル版の『ロビンソン・クルーソー』である。1869年版は1863～4年にかけて『キャッセルの挿絵入りロビンソン・クルーソー』（*Cassell's Illustrated Robinson Crusoe*）のタイトルで分冊出版されたものを一冊にまとめたものである。

カッセル版で目を引くのは、装丁などのアートワークである。豊富なイラストのほかに、全ページ飾り模様の枠で囲まれており、その縁飾りには槍、ライフル、こん棒、ナイフ、オールのほか、熱帯の鳥や植物が描かれている。この飾り枠はトマス・ロバート・マッコイドによるものである。飾り枠の効果についてブルーエットは、本としての統一感を生み出すのに一役買っていると皮肉な評価をしている¹。なぜなら、キャッセル版に収められ挿絵は複数の挿絵画家によるものであり、挿絵全体としての統一感はないためである²。また、飾り枠には植民地獲得への熱意や熱帯への憧れという枠組みのもとに、物語が進行することを端的に示しているようだ。このことは、本の表紙が濃い緑にヤシの木を型押ししたデザインであることから裏付けられるだろう、

¹ デイヴィッド・ブルーエット『ロビンソン・クルーソー』挿絵物語——近代西洋の二百年(1719-1920)』

ダニエル・デフォー研究会訳（大阪：関西大学出版部、1999年）99～101頁。

2. 前掲書、97～98頁。

17. 『ロビンソン・クルーソーの冒険』アーネスト・グリーセット画（ロンドン：フレデリック・ワーン、1876年頃）

17. Defoe, Daniel. *The life and adventures of Robinson Crusoe*. with an introduction, glossary, and illustrations. London : Frederick Warne, 187-. Illustrations by Ernst Griset, c.a. 1876.

フレデリック・ワーン者から出版された『ロビンソン・クルーソー』である。本の表紙、背表紙、裏表紙と全体が型押し模様と文字で飾られ、ロビンソン・クルーソーの28年間の手際よく伝えられている。

フレデリック・ワーン社は1865年に設立された出版社で、ベアトリクス・ポターのピーターラビットシリーズ（1902年）の出版社として最もよく知られている。19世紀の後半は多くの児童書を出版し、その出版リストにはエドワード・リー、ケイト・グリーンハウエイ、ウォルター・クレインなどの名前がある。

ワーン社版のもう一つの特徴は巻末に「用語集」(Glossary)を収録していることである。この用語集は30語からなる。19世紀後半の読者、あるいは子どもの読者には、デフォーの英語もしくは18世紀はじめの英語には馴染みのない表現もあったのであろう。これらをまとめて補足説明している。

Ⅲ. 広がる『ロビンソン・クルーソー』の世界

18. 『ロビンソン・クルーソーの生涯と冒険』J. J. グランヴィル画（ニューヨーク：D. アップルトン、1858年頃）

Defoe, Daniel. *The life and adventures of Robins Crusoe*. With a memoir of the author, and an essay on his writings. Illustrated with two hundred engraving by Grandville. The only complete American Edition. Philadelphia: George S. Appleton, c.a. 1858.

19. ズーフラー『魯敏遜漂流記』井上勤訳、坂部訓校正訂（東京：博聞社、1883年）

展示番号18はアメリカで出版された『ロビンソン・クルーソー』で、「唯一の完全はアメリカ版」と唱っている。フランス人の画家J.J.グランヴィルによる200枚の挿絵とデフォーの評伝および論文1本を収録する。総ページ492頁であるから、かなりイラストの多い版である。

J.J.グランヴィルが挿絵を描いた『ロビンソン・クルーソー』は1840年にパリのH.フォルニエ書店、およびロンドンのR.タイアスから出版された。アメリカ版のイラストは、どちらかの版のものを使用していると思われる。多葉の挿絵を盛り込んだ『ロビンソン・クルーソー』は1860年代に一つの頂点を迎えるが、1840年に出版されたグランヴィルの挿絵によるものは、その先鞭をつけたといえるだろう。

扉の木版画はクルーソーをモニュメントとして描写している。ライフルを手に、犬とオウムを従え、先住民と思しき人々を踏みつけている。モニュメントの高さはヤシの木に匹敵する。そうして、こうしたクルーソー像を家族連れと思しき人々が見上げている。

この口絵は、英語からの日本語翻訳である展示番号19にも採用されている。日本語翻訳の底本がアメリカ版なのでイギリス版なのか確認ができていないが、クルーソー的な野心をモニュメントとして表現したこの挿絵が日本の読者のロビンソン像解釈に与えた影響は少なくないだろう。なお『ロビンソン・クルーソー』が最初に日本語に翻訳紹介されたのはオランダ語からの重訳で、1850年代のことであった。

20. 『ロビンソン・クルーソーの生涯』（ロンドン：ボウ・チャーチ・ロード、1760年頃）
チャップブック

20. *Life of Robinson Crusoe, of York, mariner.* London: Printed and sold at the Printing-Office in Bow-Church-Yard, ca. 1760.

『ロビンソン・クルーソー』は多くのチャップブック（簡約版）も生み出した。ここに展示したものは24頁からなるチャップブックで、何枚かのイラストも挿入されている。

チャップブックは文字を覚え始めた人々に人気があったという。安価で小型な上に、ページ数も少なく、楽しみながら読み書きを覚えることができる。チャップブックの存在は『ロビンソン・クルーソー』の物語が普及版を通して人口に膾炙していったことを伝えている。

21. 『アレクサンダー・セルカークの来歴：本当のロビンソン・クルーソー』（ロンドン：サミュエル・ウッド、1815年）

The History of Alexander Selkirk: The Real Robinson Crusoe to which are added Sketches of a Natural History. London: Samuel Wood, 1815.

アレクサンダー・セルカークの冒険譚は、デフォーが『ロビンソン・クルーソー』を書くにあたって参考にした資料の一つと見なされているものである。スコットランド出身のセルカークは、船員との口論がきっかけで1704年9月から4年間、チリ沖の島に置き去りにされ、1709年1月にイギリス船に救出されるまでの4年4ヵ月をここで過ごした。セルカークは1712年に帰国した。セルカークの経験は、彼を救出したキャプテン・ウッズ・ロジャースの『世界周航記』（1712年）やリチャード・スティールという当時のジャーナリストが自ら編集主幹をつとめる『イングリッシュマン』に記事を掲載したことにより、広く知られたという。

22. 『ロビンソン・クルーソー』カール・マール画（ロンドン：キリスト教振興会、1890年頃）

Robinson Crusoe. His life and adventures after Daniel Defoe. Illustration by Carl Marr. London: Society for Promoting Christian Knowledge, c.a.1890.

23. 『ジェイ・スプラッグルズ版ロビンソン・クルーソー：スプラッグルがティッケル・トービー博士の学校でクラスメートに語り聞かせたお話による』（ニューヨーク：マクローリン・ブラザーズ、1890年代）

Master J. Spraggles his version Robinson Crusoe as narrated & depicted to his school fellows at Dr. Tickel Toby's Academy. New York: McLoughlin Bros, ca.1900.

19世紀後期には、絵本版の『ロビンソン・クルーソー』も多数出版された。展示番号22.はキリスト教による知識を広めようとする団体が出版したものである。単色刷のイラストと多色刷のイラスト48枚が使用されている。絵本であるため、テキストはかなり簡約化されており、ロビンソン・クルーソーに特徴的な項目をひとつずつ数え上げてリスト化するような細かい描写はここには見られない。例えば、クルーソーは1623年にイギリス北部のヨークで生まれたことになっているが、絵本では生まれた年の情報は省かれる、といった具合である。

展示番号23.は同じころにニューヨークで出版された絵本だが、かなり戯画化されている。絵本の体裁も、厚手の表紙を使わず、パンフレットのような作りである。ジェイ・スプラッグルという男子生徒がクラスメートにロビンソン・クルーソーの物語を聞かせるという設定のこの絵本では、すべての絵が石版の枠の中にチョークで描かれていく。ひとつひとつの絵が漫画のようなコミカルな表現となっていることが注目される。